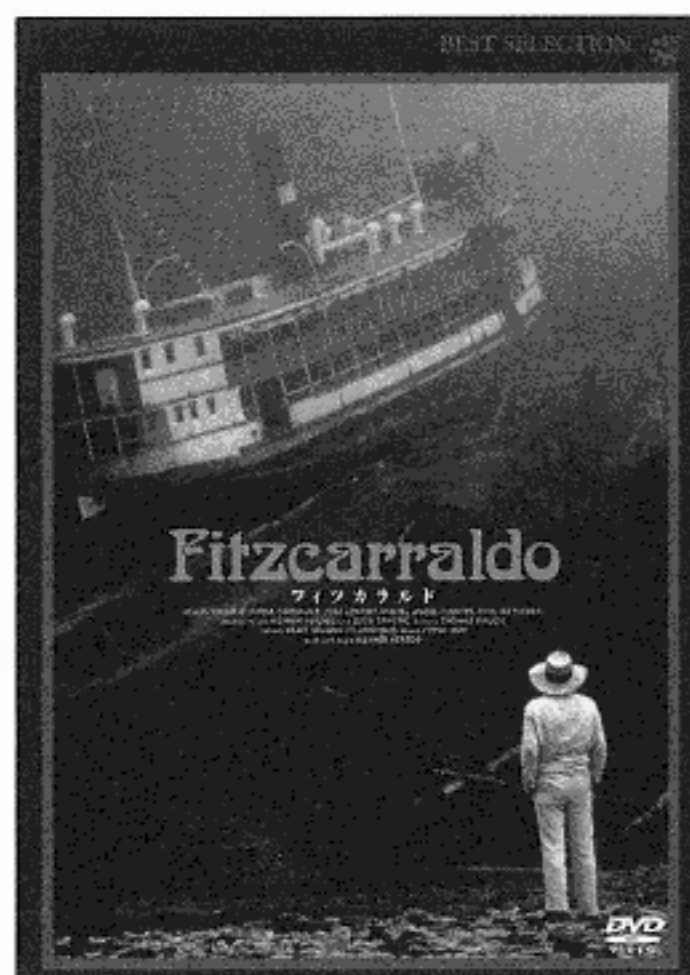


フィツカラルド



監・脚：ヴェルナー・ヘルツォーク
音楽：ボボル・ゾー
キャスト：クラウス・キンスキー
クラウディア・カディナレ
製作：1981年ドイツ
劇場公開：1981年7月15日
DVD発売：東北新社

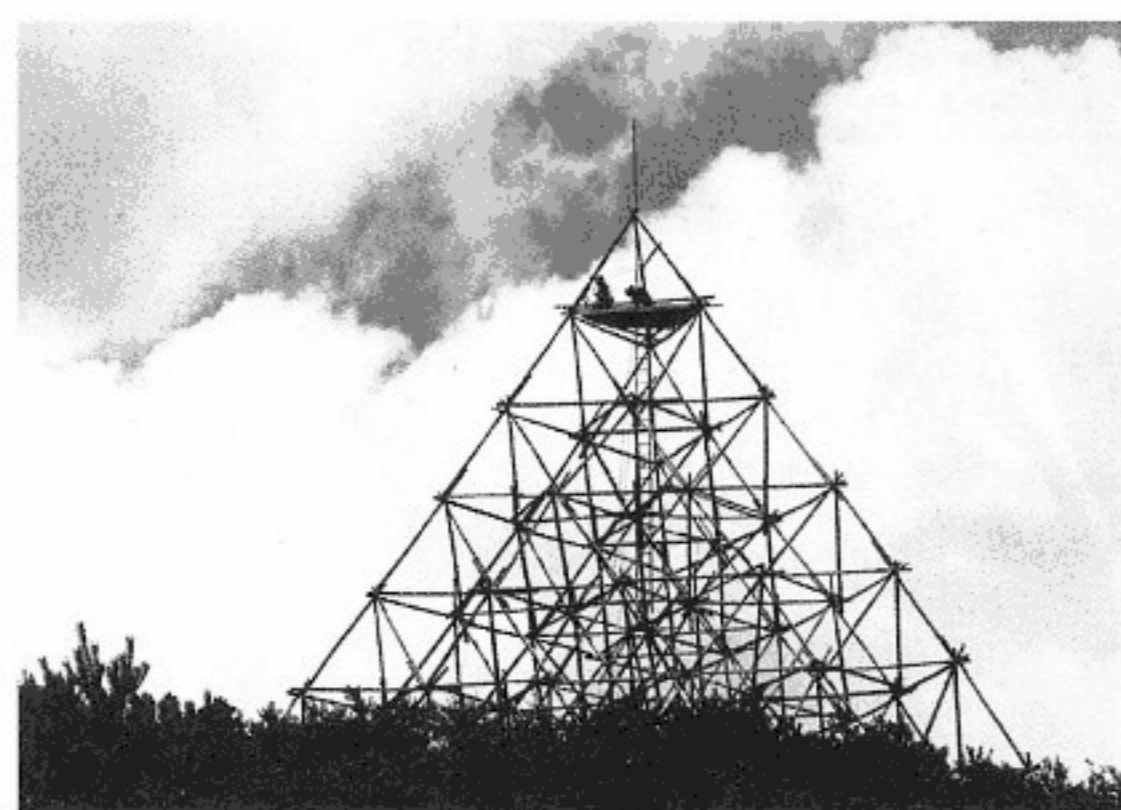
70年代、前衛美術家たちが主宰する「THE PLAY」は、ハプニングス（注1）を行う集団として関西では名が知られていた。僕は70年代半ばに活動に加えてもらい10数年間在籍した。人々の日常の或る断面を素材に、常に一回きりの行為を繰り返してきた。そんななか79年から「雷/THUNDER」という<同テーマ>、初夏に始まり初秋に終わるという<同時期>、京都鷲峰山という<同じ場所>で行ってきた10年プロジェクトがある。山頂に30メートルの正三角錐の塔（写真）を建て、天に向う頂点に避雷針を設置する。ここに雷を落とすというナンセンスを10年間続けたのである。ちなみに僕たちは避雷針を“導雷針”と名づけた。メンバーには建築家もいて入念な建設計画から始まり、毎週土日に山頂の山林に入り、木を伐採し、草を刈り、そして足場丸太を組立てながら巨大なピラミッドを建設していくのだ。毎年同じ作業

を繰り返しながらー。

ヘルツォーク監督が撮った「フィツカラルド」という映画は、狂気と妄想を描いた傑作であり、雷プロジェクトが行われていた5回目くらいの最中に、ドイツ映画祭と言う地味なイベントで上映されたうちの作品だった。そして映画の面白さ、妄想とスケールの大きさが、自分の立ち会う美術的行為と共通することに共鳴したのである。

19世紀のペルー。会社経営するフィツカラルドはオペラ好きで、アマゾン奥地にオペラハウスを建設したいと考えている。そして目的の土地及び巨大で白い蒸気船を確保しながら、多くの船員たちを乗せてアマゾン上流をひたすらさかのぼっていく。密林の奥から聞えてくるインディオが響かせる不気味な太鼓の連打。何が起こるのかわからない恐怖。銃で対抗するのではなく、ジャングルに向かってオペラ歌手が歌うレコードを蓄音機に乗せ、大音声でジャングルに向かって聞かせるフィツカラルド。

黄金郷を求めてアフリカの奥地に分け入った伝説的人物を追うコンラッド（注2）の小説「闇の奥」にまったく同じような場面の記述がある。一言で言えば白人文化と異文化との相克であった。それは、ベトナ



雷/THUNDER (1979-1988)

ムの奥地で王国を築く男の追跡を描いたコッポラ監督の「地獄の黙示録」（79年米）や、南米の奥地にエラドラドを探し、自らの王国を建設しようとしたヘルツォーク監督作品「アギレー神の怒り」（72年独）などの映画などに繰り返しテーマ化されている。「フィツカラルド」もそんな西欧文化の側から見た未開社会への恐怖や無知が描かれた。それらはすべて「闇の奥」を原典として作られているのだと想像できる。ただ「フィツカラルド」はユーモアが随所にちりばめられ、エンターテインメントとしてもうまく出来た作品だと思う。

恐怖から船員たちは逃亡し、代わりにインディオたちがたくさん乗り込んできて船は進む。危険な濁流を避けるために、蒸気船を山向こうの川に移動させる計画が実行される。不気味なインディオたちがこの計画に協力するのだが、この船の山越えシーンは本当にすごい。もちろん特撮もなく、実物大の船が人力で牽引され山を登っていくのが非日常的ではあるがリアルである。

僕らの雷計画では、直径15センチぐらいで長さ3メートルの丸太を千本近くリースし、人力で山頂に運び丸太同士を番線で



結んでピラミッドを構築していった。その年が終われば塔を解体し、山頂から丸太を引きおろすのである。急勾配に茂る木や草を刈って道をつくり、建設の準備に時間をかける。「フィツカラルド」の映像を見て、まさに僕らも同じことをしているのだという印象だった。だから余計にこの映画への共感が深かった。

アマゾンの奥地にオペラ座を作るという見果てぬ夢、いや誇大妄想を実現したフィツカラルド。しかし、インディオたちを操ったかに見えた計画は、彼らの“未開”文明には対抗できなかったというユーモアやエスプリが利いていて面白かった。82年、カンヌで監督賞を受賞した逸編だ。

hidarimaki

注1：ハプニングスは美術行為の一つのジャンルである。それまでのファインアート（絵画・彫刻など）を超越し、芸術家が、鑑賞者に対して偶発的な出来事を作り出し、鑑賞者の位置や状況に変化を起こさせたりする。60年代以降、ハイ・レッド・センター、THA PLAYなどが活躍した。

注2：ポーランド生まれの小説家。16歳で船員となり世界各地を航海した。この頃の体験が後の創作活動に影響を与える。1886年英国に帰化。代表作に「闇の奥」「密偵」「ロード・ジム」などがある（1857～1924年）。

年末も近くなったので、徒然なるままに、(株)ナイスの今年の10大ニュースを書き綴ってみた。

①政権交代って何のことはなかったということが最大のニュースだろう。あれほど「雇用」を連呼した菅首相だが、国会論戦は防戦一方で、雇用も市民との協働もまったく伝わってこない。参院選挙では松岡徹さんの議席を失い、残念至極！もう10年程前だったか、菅さんは西成のまちづくりを視察され、ボクは、その感性の鋭さに驚いたのだが、あれは幻だったのか…。

②そんな民主党政権から受けた仕打ちが、契約期限を残しているのにA'ワーク創造館を廃止するという暴挙だった。大阪府が補助金をゼロで民間に公募した職業訓練施設を2年で見事に再生したのだが、今度は国が施設そのものを事業仕分けに乗じて廃止した。ボク達は、裁判も辞さずで応戦したまま、年を越すことになるが、まるで忠臣蔵みたい。

③民主党って、ボクを嫌いなのかなって思うことが続いたが、「貧困ビジネス」の法規制議論もそうだった。住居と食事の両方を提供するサービスを抱き合わせ事業と言うらしいけど、かつての下宿屋さんのどこがいけないのか、ボクにはさっぱりわからなかった。④コミュニティハウス萩に続くまちづくり住宅事業として、(株)ヒューマンと福祉法人ヒューマンライツ福祉協会が施工する「アイビスコート」の建



民主党政権に裏切られた今年の10大ニュース

設が始まったが、わがまちの協同の趨り、文化温泉の跡地に建つ。⑤ボクは、友人の中川治衆院議員が奔走した「自立・就労議員連盟」が提唱するように、総合評価入札の導入や社会的企業の育成で、良いものを伸ばすのが戦略と思うのだが、この政権はそっちを向いていない。ガンバレ中川さん、何度そうつぶやいたことか。⑥そんなこともあって、今年は、共同連という障害者団体とのつき合いを深めて、社会的事業所促進法づくりのシンポジウムなどに足繁く通った。このグループの拠点の一つが札幌で、ボクは、社会的事業所と味噌ラーメンの虜になって、血圧を上げた。

⑦「よりそいネット」が母体になって、ようやく刑余者支援のための国の地域定着支援センターを受託したが、なんと大阪府は国庫助成を返上して半額しか予算をつけなかったのには、驚いた。⑧西成区の「在日コリアンの住まいと福祉」の実態調査を行ったが、まもなく報告書ができあがる、これは楽しみ。⑨4年近くご愛顧いただいたレストラン・ピアンは、11月「美厘」という名で新装開店した。大阪市から「社会的企業等の人材育成支援事業」の助成も頂いて、就労支援とまちづくりの二兎を追った、乞うご期待。⑩そして、『なび』もリニューアルし、「ダイアログ」をトップに載いて、50号に近づいた。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸

